

●—総合司会 「竹内好と世界史の課題」を始めさせていただきます。加々美先生、よろしくお願いいたします。

●—司会(加々美) こんにちは。午後のセッションを始めさせていただきます。午後のセッションは、松本健一さん、孫歌さん、そして私と、3人が報告をいたします。いままでの3つのセッションと、この第4セッションは非常に深いかかわりがあります。

松本さんは、ご存じのように「近代の超克」についての解説、そのほかに、竹内好についての専著、専門書があります。それから、文壇上でも、しばしばアジア主義についての論議をされたり、近年、話題になっている東アジア共同体についての議論を提起されています。

孫歌さんは、昨日のシンポジウムでもいろいろと話題になっていますように、『竹内好という問い』という本が岩波書店から出ています。また「近代の超克」だけではなく、併せて竹内の文章、十数本をまとめた本を、昨年、中国から出されています。

それ以来、中国では、いろいろなかたちで竹内好が論議されるようになりました。それは私ども日本の人間から見ても、意外なほど大きな反響がありました。量的な問題は別として、質的に竹内好の問題が非常に深く中国で取り上げられるようになりました。それをふまえて、のちほど孫歌さんにお話させていただきます。

私については、また改めて報告のときに自分で申しますので、ここでは省かせていただきます。

では最初に、松本さんからご報告をお願いします。



## 世界史の地殻変動と竹内好

### 松本健一氏

〈評論家・麗澤大学国際経済学部教授〉



松本健一です。今日は「世界史の地殻変動と竹内好」というタイトルで話をしたいと思います。

その前に、昨日、私が、竹内さんの話の仕方は、埴谷雄高さんが59分話して、1分だけ、竹内さんが反論をするという話をしました。その話の続きで、吉本隆明さんと谷川雁さんの話をしました。

その吉本さんと谷川さんの愛についての対論は、実は村上一郎さんのお通夜の晩に、11時ぐらいから朝の5時まで、6時間にわたる延々たる

大座談会というか、お通夜のあとの話をしている、そのときに気付いたことです。

ついでにもう1つ蛇足を加えますと、たくさんの異性にもてるというのが、本当の愛の姿ではなくて、一人の異性に深く愛されるかということが問題なのだという、吉本さんの反論があったと言いました。その話を10年ほど前に鶴見さんにしたところ、「たくさんの女性にもてるということも、一人の女性に深く愛されるということも、どっ

ちもつらいね」って言うのです。

これはいかにも、鶴見さんらしいなと思いました。そのお通夜のときの情景を話していて、そういう感想を洩らされました。それぞれに、人間の質というか、生きてきた生き方がよくわかるなというのが、私の感想です。

さて、今日は、竹内さんのことを問題にするわけですが、竹内さんと丸山眞男さんは、戦後思想をリードした人と言われていて、私もそう考えています。

では、竹内さんはどのような人かという、戦後思想における重しのような人だと考えています。丸山さんの弟子、あるいは丸山さんに影響を受けた人は、非常に多いわけですが、ここが面白い人間の質というか、思想家の質の問題になるだろうと思います。

これは柳田国男の意味と、折口信夫の意味というものが、非常に対照的であるように、その対照に、竹内好と丸山眞男が宛てられるような気がします。

どういうことかと言いますと、折口信夫さんの弟子たちは、最終的に、折口信夫とは何者か、折口信夫が考えていたことは何なのか、というところに問題が収斂します。

そうすると、そういう問題を考えていた折口信夫は何なのか、すべての問題が折口信夫という存在は何なのか、というところに問題が還元されることとなります。

ところが、柳田国男さんはいろいろな問題を提出するわけです。例えば、日本人はどこからきたかとか、日本人はいつごろから、集団埋葬をしたのか。例えば、いつから靖国神社のようなものをつくるようになったのか、古代からそういうことをやっていたのか、という日本人の祭り方とか宗教観、あるいは都会におけるフォークロア（民俗学）と、辺境におけるフォークロアの違いは何なのかということ。そこから翻って、天皇制というのは日本人にとって何なのか、という問題提起を、

柳田さんの弟子たちは引き継ぐのです。柳田国男が何者かということはほとんど問わなくなっています。

柳田国男の存在、それ自体に対しては謎を向けません。むしろ柳田国男が提出した問題、もしくはそれが投げかけたテーマが、どのようなかたちで日本人のなかに残っているか、そしてまた、時代の変容とともに、その問題は変わっていくのかどうか。現在では日本人の信仰形態はどうなっているのか、あるいは日本人はどこからきたのか、そのような問題として残っています。柳田国男の弟子たち、あるいは関心を持つ人たちは、みんな、柳田国男の問題を引き受けるというわけです。

一方、折口に関心を持つ人は、折口信夫とは何者であるか、そちらに全部、問題を収斂させてしまうところがあります。これが丸山眞男と竹内好という思想家の質の問題にも非常にかかわってきているのではないかと思います。

昨年から今年にかけても、丸山さんが何者であるか、あるいは丸山眞男の思想はどのようなものであるか、ということを抱う若い学者たちが出てきたり、本も4、5冊続けて出版されました。

最終的には、丸山眞男とは何者かという問題に収斂させています。戦前においては、どのような位置にあり、それが戦後思想をリードする役に、その役割を示したのはなぜか、すべて問題が丸山眞男という人物に収斂しているということになります。

ところが竹内好は、竹内好という人物に問題が収斂していくというよりも、竹内さんが投げかけた問題、これをいまでも引き受けさせられています。私は先ほど、「隠岐島コミュン」という話をしましたが、竹内さんは「隠岐島コミュン」に、人民側の文献がないということで、日本の近代の学問はすべて批判されていると言いました。しかし、一度も隠岐島に出掛けたことがないのです。自分自身の問題として、ここに何か謎があるとか、あるいはここに日本近代を批判している問題があ

る、あるいは近代とは何かという問題は考えなければならない。近代というものは、中国と日本で違う歩み方をしているのではないか、そういう問題の提出の仕方をします。もしくは、近代の超克とは何か、という問題の投げかけ方をします。

アジアは、地理的概念でも歴史的概念でもなく、そして地政学的な概念でもなく、別の「方法としてのアジア」であるという提出の仕方をします。その上に立って、例えば、アジア主義とは何なのか、それから日本の場合には、どのようなゆがみ方をしたのかと、問題をたくさん提出するわけです。

そうすると、竹内さんに興味がある人々は、結局、この問題を引き受けさせられるというか、これを解いていくことが、私たちにとって必要なことであり、「竹内好という問題」として浮上するのです。

丸山眞男という人間は何なのかというように問題が浮上するのではなく、竹内好が提出した問題は何なのか、そして、それをわれわれは、どのように解こうとするのかということが、受け取り側の違いとして現れてきているような気がします。

ですから、一昨年、ドイツのハイデルベルクで、「竹内好・国際シンポジウム」が5日間にわたっておこなわれましたが、そのあと私は、『朝日新聞』にエッセイを書きました。そのエッセイ自体は、32年前に出した『竹内好論』の新版というかたちで、後ろに「竹内好という問題」が浮上した、「『竹内好という問題』浮上」というエッセイのタイトルになっています。

この問題意識は、実は孫歌さんが出した『竹内好という問い』というタイトルと、ほとんど重なります。

竹内さんが亡くなってから、ちょうど29年経ち、来年で30年になります。3月3日が亡くなった日ですから、もうあと少しで30年経つことになります。

そのときに、「竹内好という問題」、あるいは竹

内好が出した問いが、現在もう一度問われるようになってきたのではないかと、私や孫歌さんの本のタイトル、エッセイのタイトルに象徴されてきているのではないかと思います。

私はもう三十何年前に、『竹内好論』を書きました。そして、そのあとすぐ、『竹内好伝』を書いてくれと、その当時の筑摩書房の社長岡山さんに言われましたが、私は「伝」にはまったく興味がありません。竹内さんの問題を解くことに興味があるので、『竹内好伝』を書くつもりはないと断りました。私はその当時、「竹内好の問題を解こう、引き受けよう」、あるいは「隠岐島コミュニケーションは何なんだ」と、がむしゃらに走っているようなところがありました。

私が、ものを書き始めたのは1970年で24歳でした。一方では、北一輝という人物のことを書き始め、まったく同じ時期に、「隠岐島コミュニケーション揺曳」という論文を書いて、1970年の秋に発表しました。

これが現在でも尾を引いています。私の問題関心においては、竹内好という問題は、ずっと継続しています。持続されてきていると言えると思います。

しかし、それが私個人の問題ではなくて、一昨年の9月に、ドイツで竹内好についての国際学会が開かれました。そして、こんにち、愛知大学でシンポジウムが開かれるということは、私一人の関心、あるいは竹内好にずっと関心を持ってきていた人が、私以外にも何人もいるということ。そして、それを超えて、現代という世界史の瞬間において、「竹内好という問題」が呼び返されているのではないかと、ひしひしと感じざるを得ません。

例えば、1960年代から1980年にかけては、「アジア」という言葉は、あまり叫ばれていませんでした。世界史の表面には出てきませんでした。つまり、冷戦構造のなかでは、米・ソという超大国の対立、二大超大国の問題、どちら側に付くかと

いうこと。もしくはそれに加わらない第三世界の問題と言って世界史を読み解くモノサシで、米・ソで見るか、あるいはそれに対する第三世界というかたちで見るか、でした。また、自由主義対共産主義というイデオロギー対立のモノサシで見ると。そして、それとは関係なく、1960年ごろから「アフリカの嵐」と言われるナショナリズムの動きが出てきますが、そのナショナリズムの動きはあまり評価されず、注目されませんでした。

ところが1980年末ごろになってから、これは、半分自嘲げみで言いますが、「Japan as No. 1」と言われたり、「アジアの世紀がきた」とか、あるいは「21世紀はアジアの時代になる」とか、「日本の時代になる」、もしくは「中国の時代になる」ということが言われた。アジアというものが、経済的に非常に大きな意味を持ってきているときに、果たしてアジアは、そのようなアジアの見方でいいのだろうか、ということを考えざるを得ませんでした。

昨日から今日にかけての話題のなかでも、アジアは、言ってみれば、「抵抗としてのアジア」であると。そうすると、竹内さんの「抵抗としてのアジア」というものが、現在の経済発展をしているアジアのイメージ、概念と、どこで重なるのか、いや、どのように違っているのかということ、私たちは考えざるを得ません。

しかし、米・ソとか、自由主義対共産主義という世界史のモノサシにかからなかった「アジア」という言葉が、今、世界の人々に、あるいは日本の若者に引かかるようになってきました。

要するに、それまではアジアは、ものすごく評判の悪い言葉であったわけです。遅れていて、貧困で、停滞していると。そして非民主的である、と言われていたのが、竹内さんの活躍した1960年代までのアジアのイメージでした。

ところが、そうではないアジアが1980年代から出てくるわけです。学生たちが、アジアにはビジネス・チャンスがあるとあって、大学を卒業す

るとマレーシアに勤め始めたり、香港に行き始めたりします。これは、われわれが学生時代には考えてみなかったような新しいアジアです。言ってみれば、まだ豊かとは言えないけれども、非常に活気があって、ビジネス・チャンスがあり、ある部分では非常に豊かな側面もあるというアジアは、われわれの、竹内さんの考えているようなアジアの時代には、まったく生まれなかったことです。

そしてまた、経済発展をすると、結果として、民主化をするという問題があります。今日、民主化の話題が出ていないと言われましたが、これはアメリカ、ヨーロッパ的な、西洋近代の理念であって、必ずしも普遍的な価値ではないのではないかと。ということ、竹内さんは考えているようなところがあります。

ですから、「民主か独裁か」だと、竹内さんは60年安保の最中には言いましたと、私は昨日言いました。ところが、竹内さんが作った「中国の会」の守るべき約定、申し合わせのようなものなかでは、「民主主義には反対しない」と書いてあります。民主主義は至上価値であるとか、フランス・フクヤマ風に「世界最良、最後の理念である」、アメリカはそれを掲げ終わった、そしてそれを普遍化していこうと思っている、これが世界のどこにでも通用するようになったときには、歴史は終わりであると。むちゃくちゃな論理ですよ。世界に民主化の、あるいは民主主義の理念を掲げたら、そこで「歴史は終わり」であるという考え方なのです。

いま、イラクで起こっている状況などはまったく逆です。戦後の日本がやってきたのも、実は反対の方向です。アメリカは軍事力で民主化をすれば、結果として、その国は非常に活気が出て豊かになって発展をしていくというテーゼで、戦後60年間、進めてきました。世界を民主化するという論理、民主化をすれば戦後日本のように必ず発展をして豊かになれる、という考え方です。

戦後、日本がやってきた戦略は、ぐずぐずのようですが、逆です。経済発展をすれば、結果として、民主化がおこなわれるというテーゼです。先ほど、民主化は、戦後の新憲法でうたわれたと言われましたが、竹内さんはそんなことは考えていないのです。戦争が終わったときに、上官から、「民主主義とは何か、教えてくれ」と、民主主義という言葉自体をほとんど知らないわけですから。「デモクラシー」の訳は、それまでは「民本主義」、明治だったら「民権主義」、幕末、江戸の中期だったら「下剋上」ですから。「下剋上」というのが江戸時代の「民主主義」の訳なのです。

これはある程度は正当なのです。民主主義というのは、特権階級をなくしていくという考えからです。そういう意味では、「デモクラシー」に「下剋上」という言葉を当てたのは、江戸時代の日本の民知というものを表しているとも考えられます。

とにかく、戦争が終わったときに、「民主主義」という言葉を新聞に見だし、あるいは政府からの指令がきて、日本に民主化がおこなわれる。「民主主義って何だ」と聞かれ、上官に説明したときに、竹内好さんは、「五箇条の御誓文」から説明し始めたわけです。

この発想は、昭和天皇とまったく同じなのです。戦後19年経ったときに、つまり昭和39年に、昭和天皇が記者会見をしました。そのときに、外国人記者から「日本も戦後、アメリカによって民主主義化をされて良い国になりましたね」と質問されました。

そうすると、「べつにわれわれはアメリカによって民主主義を教わったのではない。明治大帝の五箇条の御誓文に、すでに書いてある」。そう答えています。そのことへの問題意識が、おそらく出てくるだろうと思います。

さて、この「アジア」という言葉が、普通に学生たちの話題にも上って、それが昔の暗いアジア、貧しいアジア、停滞したアジア、非民主的、つま

り場合によっては独裁的なアジアという状況から変わってきたのが、1980年代です。

台湾・韓国が民主化をしましたが、台湾も韓国もまず経済発展します。開発独裁だと批判をされることもありますが、大統領が、伝統的な価値、あるいはそれを引き受けて、カリスマや権威として改革を進め経済発展をする。経済発展をすると、社会学の理論では、国民一人当たりの収入（国民所得）が、年に1万ドルを超えると、その国民は必ず民主化を主張すると言われていました。

1万ドルというのは、今の計算で言いますと120万円ですね。ということは、平均国民所得が月10万円ぐらいに達するようになると、その国の豊かになった国民は、必ず国民の権利を要求し、自由を要求し、国政に対する参政権を要求し、女性の権利を要求するというかたちで、民主化がおこなわれます。これが現在の社会学でおこなわれ始めている理論です。

これは、戦後の日本がやったことに近いのです。そしてまた、それを追いかけて、軍事力にはできるだけお金をかけずに経済発展をします。私の言葉で言うと「ウェルスゲーム（富のゲーム）」というものです。戦前の日本は「テリトリーゲーム」です。大きな領土を持って、たくさんの資源を手に入れれば、その国は発展できるという論理、戦略です。しかし、戦後の日本は、軍事力を建前としては失い、「憲法」9条も持ったというかたちで、軍事力にはできるだけお金をかけないという条件が生まれてきました。

すると、その結果として、「ウェルスゲーム」という戦略が生まれます。これは、戦前の「テリトリーゲーム」の大きな領土を持って、たくさんの資源を手に入れるという論理、戦略とは違って、しっかりとした産業を持ち、貿易を盛んにすれば、その国は発展できるという論理、戦略です。

そして、結果としてアジアは発展しました。日本がまず戦後の60年間で、あるいは1980年代までだとすると、二十何年間で発展をしました。

そうすると、当然、民主主義が一番いい価値であるとうたわれるようになっていったということになります。台湾や韓国や香港でも、結果として、香港では民主党もできました。私は鶴見さんと台湾に行きましたが、1986年に最初に行ったときには、経済発展はしていましたが、「戒厳令」がまだ敷かれていました。

その翌年には「戒厳令」がなくなり、その数年後には、国民投票で大統領が選ばれるという、まさに民主化の状況が出てきたということになるだろうと思います。

そのように考えると、「アジアの発展はすごい」。かつては開発独裁（権威主義体制）とか、非民主的と言われていたアジアにもう一度注目しなければならないのではないか、という問題意識が生まれてきました。

そこで、「アジアとは何か」というテーマが、1989年の冷戦終焉後に世界史的に浮上してきます。米・ソではなく、「アジア」というキーワードが登場してくるわけです。

その結果として、「アジア主義とは何だろう」と。場合によっては、現在、中国や日本で主張されている「東アジア共同体」も新アジア主義なのではないか、という言説さえも出てきます。

私はべつに、東アジア共同体がアジア主義だとは思いません。まだまだ試行錯誤のところがあります。東アジア共同体に対しては、私は「Asian common house」をつくれと言っているところです。それについては、今、この講演で述べることはできませんが、あとで補足できるとすれば、していきましょう。

つまり、冷戦構造が崩れる、1989年のベルリンの壁が崩れたあとに、米・ソという対立がまったく意味をなさなくなってきました。すると、余計に今度はまたアジアという問題が、ヨーロッパ以上に経済発展をしているアジアという問題意識が出てくるのです。

具体例を挙げているときりはありませんが、現

在、世界の造船量は、35%を韓国がつくっています。日本が25%をつくっています。中国が15%をつくっています。この三国を合わせると、75%になります。

それを見ただけでも、各国、世界、とくにヨーロッパの国々は、船を持って海に面している国も多いわけです。しかし、世界の75%の造船量を、アジアのこの三国だけでつくってしまうということだけでも、「アジア恐るべし」という考え方が、当然出てくるはずですよ。

ですから、ヨーロッパのほうからわざわざ、アジアとヨーロッパが協力して貿易を盛んにするような発想をしようという、ASEM（アジア欧州首脳会議）が提起されるし、あるいはアメリカもアジアに注目をして、APEC（アジア太平洋協力機構）という構想も出てくるということです。その発想も冷戦構造が崩れたあとで出てくるということになります。

その上で、例えば、9・11のテロがあって、アメリカがアフガンを攻撃します。そして、そのあとではイラク攻撃をします。そうすると、アフガンの攻撃に対しては、テロリストが隠れているということが世界的に認められていましたから、アフガンに対して、テロリストは排除するというアメリカの理念に対しては、一応、国際社会が協調せざるを得ないというかたちで、中国、ロシアも含めて、世界のほとんどの国が、アフガン戦争を支持せざるを得なかった、支持したということになります。

ところがそのあとで、アメリカはイラクに大量破壊兵器があると、そして、それがイラクにいるテロリストの手に渡る、あるいは世界のテロリストの手に渡っていくということを阻止するために、つまり大量破壊兵器を探し出して廃棄することと、そしてそれがテロリストの手に渡るということを阻止するという目的のために、イラク戦争を始めます。これに対しては、世界のほとんどの国が「ノン」と言いました。

ところが、日本はそのアメリカのあとをくっついて、イラク戦争に賛成するというかたちを取ってしまいました。同意を示すというかたちを取って、自衛隊も派遣してしまいました。私は最近、「憲法」9条を堅持すべきという小田実さんと、私は改正すべきという松本が、「テレビ朝日の『朝まで生テレビ!』という番組で、イラク戦争のときには、二人で反対したよね」と言い合いました。

イラク戦争の前、だいたいイラクに大量破壊兵器があるかどうかはわかりません。そして、それがテロリストに手に渡ることも考えられません。むしろ、フセインは独裁的な権力であるけれども、逆にイラクのなかにはテロリストはいなかったわけです。それはフセインの独裁体制であるからです。この独裁体制に対する反勢力は存在し得ないというかたちに国内は徹底的に鎮圧されていたというかたちになっていました。

結果とすると、フセインがいなくなったことによって、イラクのなかに、たくさんのテロリストが入り込んだという新しい状況が出てきています。そのため現在でも、テロ戦争が続いている。

アメリカはイラクの民主化をすることによって、中東全域を民主化するという、3番目にくっつけたような理由を挙げていましたが、とにかくイラク戦争のときには、アメリカは国連でも同意が取れずに、国連決議も引き下げて、そして米英を中心とする有志国連合で戦争をやったというかたちになります。

このときに、「絶対にそれはおかしい」と言い続けたのがフランスとドイツです。フランスとドイツは、米英主導の19世紀、20世紀の近代史というもの、これは、「民主主義は、最良最後の理念であるから、それを遂行するためには、軍事力を使ってもいいのだ」という発想に対して、そのアングロ・アメリカンの考え方に対して同意できないと、ヨーロッパにはヨーロッパの道があると考え始めました。その契機がイラク戦争でした。

もちろんその前に、EU（欧州連合）という存

在がありました。21世紀に入ると、ユーロという統一通貨もつくるようになりました。ユーロというのは、ヨーロッパ統一通貨ですから、そういうものを考えるようになりました。

これはラムズフェルド国防長官が言ったことで、ブッシュ大統領がそれを追認したのですが、アメリカ、イギリスが掲げてきたような西洋的な近代と違う方法が、古いヨーロッパには、古いヨーロッパなりの回帰であると。私はこれは違う、と考えました。

ともかく、フランスとドイツがアメリカに対抗してヨーロッパ主義を考えようと言ったときには、EUがますます力を持っていくということになります。世界史は、米英が指導して、世界はみんな、それについて来ればいいのだ、ソ連が崩壊したあとは特にそうなのだ、ということに対する「ノン」という動きが出てきたのです。

その結果として、かつて日本で、「近代の超克」「アジア主義」の問題ということを書いてきた人がいたな、ということに目がいき関心が向いたわけです。ドイツで「竹内好・国際シンポジウム」が5日間に渡っておこなわれました。アメリカ、イギリス、オランダ、ドイツ、そして日本、中国、韓国の人々が集まって、竹内好を論じるという機会をドイツが提案しました。

「これはイラク戦争の余波である」と言ったら言いすぎですが、そういうところから、ヨーロッパは、もう一度主体性を持って世界史を見直さなければいけない、近代史というものを考え直さなければいけないということで、「竹内好」の国際シンポジウムもおこなわれたし、竹内好のドイツ語訳の本も出ました。そういう動きになっているのではないかと思います。

現在では、アメリカのなかでも、アメリカが一極支配する、あるいはユニラテラリズム(unilateralism)、一国主義というかたちで、世界を一極支配している行動、一極行動で世界史を見てはいけないのではないかと、という関心がじわじ

わと出てきています。

そして、竹内好をも含めた、日本での戦前の「近代の超克」や「アジア主義」という動きは何だったのか。これまで「近代の超克」を、日本の戦前の座談会、あるいはそのテーゼを問題として取り上げたときには、アメリカでは、これは「ファシズム」だと言って言語道断だったわけです。

ところが、今アメリカでも若い40代ぐらいの研究者たちが、日本の「近代の超克」という座談会を読み直し、竹内好の論文を評価し直すという動きを提出してきています。

つまり竹内好は、われわれが30年間、ずっと関心を持ち続けてきた人材ですし、また思想であるわけです。が、それ以上に、世界史のある動向が、「竹内好という問題」、近代とは何か、近代の超克とは何か、アジアとは何か、アジア主義とは何かという問題を、押し上げているのではないかと、私は考えているのです。

ですから、これはただ単に竹内好の人物とは何か、竹内好の思想とは何かというかたちで、全部問題を収斂していくのではなく、「竹内好の提起した問題」を、現在問い直すということが、われわれに要請されているということです。「竹内好という問題」を、戦前に形成され、戦後に「民主か独裁か」を言い、一時代を風靡したかのような人物であるから、もう一度取り上げ直そうというだけではすまない、むしろ現代史的な要請であると、世界史的な要請だと私は考えています。

これは、現在の日中間のギクシャクした問題を



考える場合にも生きてきます。小泉首相は靖国問題に中国が口を挟むのはおかしいと、それは心のなかの問題だと、ことさらにけんかをしています。小泉首相はポピュリスト（大衆迎合主義者）です。ポピュリストとは、国民のほうだけを見るのです。国民の人気を取ろうとばかりするわけです。だから日本の政治家のなかで国内に人気がある政治家は多いです。例えば、大隈重信がそうです。大正4年、「対華二十一箇条の要求」をしました。これは日本の国民には評判がいいわけです。中国での利権を日本によこせということですから、非常に評判いいのです。ところが、そのように国民のほうばかりを見るということは、必ず外国に対してお尻を向けているという外交姿勢になります。

戦前の歴史で、その次のポピュリストというのは、近衛文麿です。戦争をしている相手の中国の国民政府、蒋介石政権に対して、「国民政府を相手にせず」と。そう言ったら、これは外交交渉も何もできません。裏取引も、正式の交渉もできません。その当時、近衛文麿の国民人気は、七十何%あるわけです。そして、「政党はいらない」と言って、全部なくしてしまうわけです。そして、政治家は大政翼賛会にみんな入ってしまうというかたちを取るわけです。

とにかくそれは、日中戦争下で「国民政府を相手にせず」といって、国民政府にも中国にもお尻を向けているという状況です。

現在の小泉さんも、外交的にほとんど同じような態度を取っています。これは小泉さんの問題だけではなくて、日本の政治家の問題でもあり、日本国民の問題であります。つまり、その日本国民にとって、あの戦争は何であったかという問題意識、歴史認識と、アジアへの侵略戦争を指導したA級戦犯が祀られている靖国神社の問題は切り離せない問題なのです。

「あの戦争とは何であったのか」ということを考えるためには、竹内好さんの「近代の超克」という論文を、われわれは、もう一度考え直してみ



なければいけません。

日本人は、戦後、アメリカとうまく手を握り日米同盟を結びました。そして、繁栄をし民主化をしました。そのいい方向に向かった側面も多いわけですが。その結果として、われわれは、あの戦争で負けたアメリカに対して民主化をしていなかった日本が悪かったと思う側面もあります。そこで、アメリカの理念を受け入れて、日本も民主化したという考え方が生まれます。これが日本人のなかにいま定着している歴史意識になっています。

そうすると、あの戦争で中国に負けたという認識はどこにも残っていません。少なくとも、今の政治家のトップにいる人々ですね。しかし、それがタカ派だと言われましたが、中曽根さんとか、それから田中角栄さんなどまでは、一応戦争に出兵しています。田中角栄さんなんて、二等兵で出て行ったわけです。彼らは侵略戦争についての痛みを持っています。自分たちは中国を侵略したということの歴史認識も、「痛み」としてそれを抱え込んでいる人々がいたときには、まだいいわけです。もう、その人たちがいなくなっています。そして、われわれ国民もそれを実感しなくなってきました。ですから、竹内好さんが、あの戦争をどのように認識していたかという「近代の超克」という論文を読み直してみなければいけません。そこには、大東亜戦争の二面性、米英との戦争は帝国主義同士の戦争、われわれもまた帝国主義であるということ。つまり、帝国主義「間」戦争である、帝国主義同士の戦争であると、こういう側面が一方ではあります。これは別にどちらが勝つか負けるかわからないことです。反省すべきことはたくさんありますが、反省すべき側面は非常に少ないのです。もちろん、それでも西洋の国際法は近代国民国家「間」の理念ですから、国際法を破ったことを反省しなければなりません。いずれにしても、帝国主義「間」戦争として、米英とは戦争をしました。

ところが中国やアジアに対しては、まさに帝国

主義国として侵略の戦争をしました。このように、大東亜戦争は二重性格だと考えるべきだと思います。竹内好さんの論文には、そのことが明確に書いてあります。

そして、その問題意識を引き受けざるを得なかった私は、現在でも「大東亜戦争」と言い続けているわけです。「太平洋戦争の二重性格」とは言えません。太平洋戦争は、アメリカとした戦争です。だから戦争を始めたときも、「太平洋戦争」という名前をつけようという海軍の主張に対して、政府のなかで問題になりました。大本营政府連絡会議では、「太平洋戦争」ならばアメリカと太平洋上で決戦をして太平洋を奪い合いという覇権競争にすぎません。それでは、戦争の一分の理念もなくなってしまいます。大東亜の解放という理念がなければいけないのですから、だから「大東亜戦争」であると言って、結果として、「大東亜戦争」という名称に決まったわけです。

その大東亜戦争が、実は帝国主義「間」戦争と、帝国主義的な侵略戦争という二重性格を持ったということ、竹内さんはとらえています。

この問題意識を、今こそ、「近代の超克」という論文を読んで、われわれは考え直さなければいけません。それが、あの世界史的な戦争をした、「世界史の哲学と大東亜戦争」という座談会も当時おこなわれましたが、「世界史的」と言うと、評判が悪いわけです。しかし、確かに帝国主義の終焉という、逆説的な意味で、世界史的な意味を持っていました。そして、今でも世界史が動いたときには、そのときに、あの戦争をどのように評価すべきか、どのように認識すべきか、ということに対する非常に大きな暗示を、竹内さんの「近代の超克」という論文は、私たちに教えてくれているわけです。

この問題を抜きにすると、今年、佐藤優さんという「外務省のラスプーチン」と言われた人が、大川周明の『米英東亜侵略史』を読み直し、『日米開戦の真実 大川周明著「米英東亜侵略史」を

読み解く』という本を出しましたが、私の言葉や論文も引用されていますが、おそらく、彼は竹内さんの「近代の超克」を読んでいません。読んでいないと、その戦争の侵略性というものに対して、意識が非常に希薄になります。その結果として、大川周明のとらえ方も非常に一面的になります。

彼は若いから、まだまだ問題を考え直してくれる側面があると思いますが、大川周明を読み直すのでも、日中戦争が泥沼に入ってしまう「解決不能」になってしまったから、われわれは大東亜戦争を起こしたということが、大川周明自身が出ている言葉です。

ですから、大東亜戦争はなぜ起こったかという

と、日中戦争が泥沼に入って解決不可能な状態になってしまったということ。これが大東亜戦争に入ってしまった根本の問題であるということは、大川周明でさえも、痛みをもって受け止めていた側面があります。

このようなことを、われわれは改めて考え直さなければいけないのではないかと思います。「竹内好の世界史的な意味」とタイトルを変えたほうがいいかもしれませんが、これで「世界史の地殻変動と竹内好」という話を終わりにしたいと思います。

どうもありがとうございました。



●—司会 ありがとうございました。次に、40分ほどで孫歌さんにお話をお願いしたいと思います。私から松本さんについては、あとで私の報告のなかでお話しますので、ここでは差し控えます。では、孫歌さん。お願いします。